ピアニスト瀬田敦子

第1章　「ピアニストへの道」

私はピアニスト、人生の大半をピアノと共に生きてきました・・・
と言っても阪神大震災に遭うまでは「音楽大学を卒業」して「ピアノを教えて」そして「時々コンサートに出演する」といった、ごくありふれた普通の主婦として、夫と一人娘と愛犬と共に平凡に暮らしていました。

阪神大震災が起きた1995年1月、39歳だった私は兵庫県の武庫川女子大学でピアノを教えていました。
震災ではたくさんの学生さんや友人達が一夜にして亡くなり、特に一番親しい同僚であった猪木聡子さんが亡くなったのは私にとって大ショックであり、なぜあんなに若く才能あるピアニストが亡くなって、私がまだ生かされているのか？という自責の念に駆られました。毎日のように報道される死者の数や被災地で救助活動を続ける人々を見て、「私はなんて無力な人間なのだろう！」と悶々とし、「こんな時にピアノなんて！」という想いから3ヶ月ほどピアノを弾くこともできませんでした。

そんな私を救ったのがアルゼンチンピアニスト、エドゥアルド・デルガド氏のチャリティコンサートです。
恥ずかしながらピアノの音を聴いて涙したのはその時が初めてでした。美しい音色が私の心の琴線に触れ、「音楽には人を慰め、勇気づける力がある」という事を知ったのです。それまでの私にとっては、音楽はお勉強の一環でしかありませんでした。「大学で学んだ事を学生に教える」そして「時々自分が研鑽を積んだ楽曲をコンサートで発表する」と言った「全く社会や人々の感情とは関わりのないところで」でも「常識的に」生きていました。今思えば、それが家族の望みでもあったかと思います。でも私はその「常識」を逸脱し、妻、母としての役目や嫁、娘としての役割をかなぐり捨てて、ピアニストへの道を邁進し始めたのです。

デルガド先生のコンサートの後、直ぐ楽屋に駆け込んで先生に指導を仰いだ私は、それから先生のもとで研鑽を積み、「人の心に触れることのできる美しい音」を求めて昼夜を問わずピアノに向かい、持てる全ての情熱を注いできました。それが私にできる、若くして亡くなった猪木さんへの唯一の追悼だと信じ、ひたすら頑張ってきました。
おかげさまでデルガド先生に師事して一年後（私が41歳の時）イタリアで開催された国際コンクールで優勝し、ヨーロッパデビューのチャンスを得ました。そして2003年には日本でも、デルガド先生から教わったアルゼンチンの作曲家A・ヒナステラの曲を発表し、大阪のザ・フェニックスホールのエヴォリューションシリーズに採用され、クリティックククラブ奨励賞を受賞するなど、確実に活動の基盤が広がっていきました。2004年には同じくイタリアで開催された国際コンクールでヒナステラ特別賞を受賞し、2005年にはニューヨーク大学とカーネギーホールに招待されて演奏しました。

それからの私の人生は激変しました。長く勤めていた武庫川女子大学を退職し、演奏活動に専念しました。そして娘の大学卒業を機に主人は早期退職をし、2人でタイへ移住し、タイ・チェンマイのパヤップ大学音楽学部客員教授としてピアノを教えながら演奏活動を続けました。ありがたいことにパヤップ大学のご理解により、夏の間3ヶ月間はヨーロッパへの演奏旅行をお給料をいただきながら続けることができ、キャリアを積むことができたわけです。このタイでの10年間は私の全盛期だったと思います。学生たちは日本と違って怠け者でしたが、先生を尊敬し私を心から慕ってくれました。タイでは新しく生まれ変わった私の信念に基づき「真の音楽とは何たるか？」「美しい音を出すテクニックとは？」を一生懸命教えたつもりです。学生たちは今でも私に習ったことを誇りに思い、若い世代に繋いでくれています。そしてパヤップ大学からは名誉教授の称号をいただきました。ありがたいことです！

さて、そんな幸せなタイでの生活でしたが、タイの法律で60歳という定年を迎え、2018年（62歳の時）心を残しながらも新たな舞台を求めてポーランドへ移住しました。ポーランドはヨーロッパでも特に音楽的で私の大好きな国でした。旧知の友人も多く、すでに2014年にヨーロッパ演奏旅行の拠点として小さなアパートとピアノを買って夏の間よく滞在していました。2017年にそのアパートを一回り大きいアパートに買い替えて、翌年1月夫と共に移住しました。人生2度目の国際引っ越しです。本来なら日本へ帰国して親の介護に専念すべき時期だったのでは？と思わなくもなかったのですが、すでに夫の両親は他界し、私の父も他界していました。残った私の実の母は当時92歳で、認知症も無く健康で、シニアホームに入居を決めていました。

それからの8年間、ポーランドで私は思う存分ピアノを弾きました。プロのピアニストとしてドイツやイタリアやフランスにも招聘され、ウクライナでも4回オーケストラと共演しました。アパートも防音工事をして、スタインウェイピアノO型を置き、ホームコンサートを開催したり、地元では有名人となり名誉市民の称号もいただきました。

第2章　「70歳を迎えて」

そして今年私は70歳、夫は75歳になりました。さて、人生の最終章、どのように生きたいかを考えた時に、このまま「ポーランドでピアニストとして死にたい」と望む心と、「日本で100歳を迎えようとしている母のそばに、1人の娘として帰りたい」という思いの間で悩みました。夫は英語もポーランド語も得意ではなく、病気になったり1人になったら日本へ帰りたいと言いますし、私は私で、旧知の友人たちや私のファンの層も高齢化が進み、近年もう若くはない自分の年齢を実感するようになりました。

そしてコロナ禍を経て世界の情勢は一変しました。AI化が進み、ウクライナ戦争で難民が溢れ、音楽や文化に対する国の予算は減る一方です。お年寄りは外出を控え、若い人はポップ音楽を好み、ヨーロッパでもクラシック音楽は廃れてきています。そんな中でも2026年もイタリアやスペインの音楽祭に呼んでいただいたり、ウクライナのオーケストラから戦争が終わったら来て欲しいとお声がかかったり、「ありがたいお誘い」に「まだまだ弾きたい」と思う気持ちが勝る日もあり、本当に迷いました。その未練を全て振り切って日本帰国を決心したのはつい最近のことです。

ポーランドの友人は本当に仲よくしてくれて「ATSUKO！なぜ今更日本へ帰るんだ？！」と半ばお怒りの声さえ聞こえてきます。でも私の、そして夫の日本人としての「血」は日本帰国を選択したのです。すでにずっと母の面倒を見てくれていた弟は、59歳という若さでALSという難病にかかり他界してしまっていますし、多くの叔父叔母も亡くなっています。「せめて母が生きてくれているうちに、同級生がまだまだ元気なうちに、日本へ帰りたい！」そう思いだすといてもたってもいられなくなりました。日本もずいぶん変わってしまったことと思いますが、浦島太郎の気分で帰国を楽しみにしています。

今回、帰国記念、そして70歳記念の最後の大きなコンサートとして、阪神大震災以来ずっと活動を共にしてきたJAFS（アジア協会アジア友の会）と一緒に関西ではザ・フェニックスホールで、関東ではミューザ川崎で、チャリティコンサートを開催します。故国を離れて18年も経つのにまだ覚えていてくださる友人やファンの方達のために、今まで私が経験してきたすべての感情を込めて、私の心の声を音に乗せて伝えたいと思っています。特にポーランドで培ったショパンへの深い思いを聴いて頂きたいと、ショパンの曲を中心にプログラミングしています。

第3章　「帰国後の抱負」

これからの事・・・人生100年時代と言われる中で、母をお手本に、私の人生のこれからの30年を考えないわけにはいきません。第1に「今まで私のピアニストとしての生き方を応援し続けてくれた夫や母に少しでも恩返しができたら・・・」と、本当に願っています。そして第2に「デルガド先生から教わった宝物ー魂に触れる音を奏でる大切さと音楽に対する美しい感情ーを若い人たちに伝えていけたら・・・」と思っています。

今年図らずも、私が会長となりヒナステラ国際協会を立ち上げました。すでにヨーロッパでNPOの登録を済ませ、恩師デルガド先生を名誉会長に、ヒナステラのお嬢様Giorgina さんを名誉会員に迎え、各国の著名な音楽家に支部長についてもらい、2033年のヒナステラ没後50年のイベントに向けて、世界中にヒナステラの音楽とその音楽哲学を広めたいという目的でスタートしました。彼の音楽哲学を一言で言い表すなら「人間の感情を忘れてはならない！」という事に尽きると思います。私は、その音楽哲学こそ「私が若い世代に伝えたいと思っている」そして「私自身も励まされ続けてきた普遍的価値である」と信じて止みません。今年日本で「ESPRESSIVO GINASTERA」と題して、発足記念コンサートを開催します。恩師デルガド先生の東京リサイタルも開催します。そのためのクラウドファンディングも実施中で、その中に私のヒナステラに対する思いもすべて載せていますので、ぜひ一度ご覧になって下さい。（ビデオも見ていただけます）私は今、今後もこのヒナステラ国際協会の発展に尽力していく事に使命感すら感じています。

https://motion-gallery.net/projects/a-ginastera

最後になりましたが、具体的には日本帰国後、ボランティアで高齢者の方や学童保育の子どもたちにピアノや英語を教える機会があれば嬉しいですし、JAFSの会員の方たちとも、ピアノや英語を学ぶ会、国際感覚を語り合う会などを立ち上げて交流し続けていきたいと考えています。私自身を含め、高齢者の人生は決して余生ではなく、人生で一番輝かしい経験ができる時期として、少しでもそのお手伝いができたら「私の帰国後の人生をさらに充実させることができるかも」とあつかましい抱負を抱いています。